

組合員紹介

大島広明さん

勇退記念・半世紀を振り返る

ダンブ支部の大島広明さんは、今年五〇年にわたるダンブ人生に幕を引くことになりました。大島さんに関東ダンブ初期の闘いを振り返っていただきます。

ダンブスト・江端商事争議

大島さんは昭和四十三年、二

十二歳でダンブに乗り始めました。建材店での仕事を終えて、当時都賀町家中に砂利採取工場のあった江端商事（現工バタ）で代車として働くようになります。昭和四十年代後半の高度成長期でした。

「組合に入ったのは昭和五〇年だったと思います。当時県内の砕石業界では「さし枠撤廃運



を勝ち取る」と記載されていますが。

「それは杉山さんの記憶でしょうけど、そんなに上がらなかったと思いますよ（笑い）」。

江端商事でのダンブストライキは業界に衝撃を与えます。大手砕石会社では「組合員は使わない」という関東ダンブシフトが広がり、二年後の昭和五三年、思川砂利（現オリス）で組合員全員が解雇される「思川争議」が起こります。

前田道路三郷工場での争議と

「当時の組合は何にもなかった。ひたすら道交法闘争の日々です。重量で組合員が逮捕され

道交法闘争で不当逮捕

「当時の組合は何にもなかった。ひたすら道交法闘争の日々です。重量で組合員が逮捕され

ともに、労働者性の確立されていない時代のダンブ争議として先進的な闘いでした。

道交法闘争で不当逮捕

たらみんなで警察署に抗議に行ったり、大宮や古河で道交法の学習会があったり。組合員は三〇代が中心だから元気だった。

「私は重量測定は任意だから測定拒否で頑張るのが基本でした。」

私も古河市で検挙されて教科書どおり測定拒否したら逮捕されました。古河警察署に仲間が集まってくれました。留置場の中にも仲間の声が聞こえるんです。「不当逮捕だ」「釈放しろ」って怒鳴ってる声。うれしかったけど生活もあるし、いつまでも入っているわけにもいかないでしょ。一泊して切符にサインして出てきました（笑い）。



当時の藤岡台貫測定の様子

ダンブ一揆・藤岡事件

そして昭和五十五年九月三日、いまや伝説の「藤岡事件」が起こります。

大島さんも藤岡警察署に駆けつけました。「とにかく当時の取締りはひどかった。みんなの怒りが爆発したんです」。

地元紙によると、この年四月に藤岡台貫所を開設以来、新任署長の指揮で八月までの間になんと八百台も検挙していました。事件当日、組合員が測定現場で白バイに足をひかれて負傷、抗議した別の組合員は私服警官

に「体落とし」で投げられ負傷します。事件を聞いた組合では組合員三〇名で藤岡署に行き説明を求めました。ところが警察は機動隊を動員して拒否します。無線などで事件を知ったダンブ労働者や一般市民が続々と警察署に集結し、ダンブ六〇台、数百人の群衆が深夜まで警察署を取り囲みます。翌日一五〇人規模の抗議集会を行い、この間署長室への投石容疑などで組合員三名が逮捕されます。

栃木県警は対策会議を開き連日機動隊を配備、さらに国体期間中に組合が大規模な集会を行う情報を入手、県内では戦後初めて関東管区に約四百人の機動隊出動を要請、まさに現代の「百姓一揆」でした。大島さんは語りま

抗議のダンブ六十台

藤岡署に押しかける



昭和55年10月1日「下野新聞」

「業界の基本的な構造はこの半世紀にも変わっていない。国、警察は本気で過積載をなくそうなんて考えていない。生かさず殺さずでダンブはいつまでたっても逃げ回りながら仕事を続けるしかない」

長年の思いを込めて警察庁に

大島さんは今年十月、組合の警察庁要請に参加しました。警察が生コンなど受け取る業者を徹底的に取締り、国が定量積載でつくられた単価を設計に採用すれば過積載はなくなります。こんな簡単なことがなぜ

「長年できないのか」。大島さんの訴えに警察庁幹部もうなずくしかありませんでした。

「なんとか少しでもダンブの働く環境を変えたかった。現役を離れても組合を応援していきたいと思います」。



組合員は私を含め数名だけでした。自然と私が首謀者になり、杉山さん（関東ダンブ第一号専従者）が争議支援に入りました。私はやるからには最低でも一か月は走らず我慢しなきゃだめだと思ってました。ところが一週間くらいで音を上げる人が出てきました。仕方なく会社側と交渉し解雇の撤回と単価の若干の改善で妥結しました」。



佐野警察署への抗議行動

栃木県砕石組合は今年創立五〇年記念式典を開催。エライ人たちがリッパなお話をされたことでしょう。しかし、社会を支えているのは圧倒的多数の無名の労働者です。大島さん長年ご苦労さまでした。